

## 地球惑星科学のミッション

## Mission of Earth Planetary Science

# 松井 孝典 [1]

# Takafumi Matsui[1]

[1] 東大・院・新領域

[1] Grad. Sch. of Frontier Sci., Univ. of Tokyo

我々は今、地球システムの中に、人間圏を作って生きている。そのために、地球システムに能動的に関り、一方で人間圏の急速な拡大もその原因だが、地球システムの変動にもろにさらされている。前者は、例えば、地球環境問題であり、資源・エネルギー問題であり、後者は災害である。人間圏を作って生きるためには、地球(海洋)や宇宙を知らねばならない。我々とは何か、どこから来て、どこへ行くのか、それを問うのが地球惑星科学である。また、上で述べた文明の諸問題に対処するための基礎科学も地球惑星科学である。というわけで、21世紀の人間圏にとって最も重要な学問分野が、地球惑星科学といえる。

以上は世界共通のことだが、日本はその重要性が世界のどの国より高い。海洋国家であること、宇宙に先進的に関ってきたこと、地震や火山や台風、津波などの災害を最も身近に感じる国であること、資源に乏しいことなど、いくつもその重要性を指摘できる。そのため、国際的にもこれまで、地球観測サミットなどを提案し、様々に貢献してきている。一方で、研究や教育現場では、昨今その凋落振りが著しい。本来は上に述べたように、国家として重点的に振興を図らねばならない分野であるにもかかわらず、むしろ逆の現象が起きている。その理由の一つはこの学問の特殊な背景にある。例えば、関る学問領域の広大さである。いまや一つの大学でその全てをカバーすることなど不可能に近い。人材の育成も、それが基礎科学(研究者)から応用科学(技術者、政策立案など)にまで広がるため、一つの大学では閉じない。ある意味では明治以来の高等教育のシステムの変革まで必要である。

このような中で、新たに地球惑星科学関連の学会が一同に会して、研究や教育について論じる場ができたことは良い契機である。この際、これからのこの学問分野の振興を如何に進めるか、会員が本気で考えなくてはならない。大げさに言えば、我々は今、この学問の存亡の岐路に立っていることを認識する必要がある。本講演では、これからわが国においてこの学問を如何に振興するか、明治以来の国の取り組みを振り返りながら考えてみたい。